
とある咎人達の冒険譚

篠楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある咎人達の冒険譚

【Nコード】

N1521Y

【作者名】

篠楓

【あらすじ】

自らの異能により家族を全員殺してしまった少年…しじょうましの四条幻篠はある日、偶然(?)死んでしまう。が、(自称)神様に自分の「咎」の真実を知り、神の強い願いで異世界に転生することに。そこで人々から迫害されているが世界を救った英雄《堕英雄》レット・フォードフィールドに出会い、無駄にでかい事件、戦い、そしてギャグと濃い日々を送っていき、罪の意識で汚れた心は解けてゆく。って違う!!濃いのは人物のキャラだツツ!!!

……一見順風満帆に見える(?)のだが、問題は根本的な

所にあるのだった。それは幻篠が美少女…アリア…フォーウッドの
体に移された事だった!!!!

※常にテンション高い・TSもの・亀更新・大器晩成タイプだけど、
OKな方はどうぞ!!!! ※『黄金炎の幻篠』からタイトル変更

プロローグ：英雄達の邂逅（前書き）

初めまして！

篠楓と申します。

自分の妄想を小説にしてみました！

これを読んで「おもしろい」と、

ほんの少しでも思ってくれると本望です。

プロローグ…英雄達の邂逅

アイル歴3076年。

俺は今、人生最大のピンチだ。

もちろん、これは比喩的な表現ではなく、紛れもない事実。

修羅場の数なら誰にも負けない自身があったが……限界、つてものが在るんだな。

こんな危機なら数多く乗り越えてきたのに……。
でも、

この場合は仕方なくもあるかもしれない。

偶然だったんだよ……。偶然。

イノシシ探してたら、いきなりこれだ。

いや……。でも、一縷の望みに賭けてみようか……。

手から紅蓮の魔方陣を放つ。

俺はこんな危機的状况で、大魔法を行使するようなバカではない。

この魔方陣——『術式』の名前は、『格納庫^{ストレージ}』。

別空間にある物質体をこの術式により、空間に穴を開けて出現させる、中級魔法。

俺は右手に愛剣——絶龍剣・エターナル——を持ち、一瞬、身構える。

よく観察すると、この目線に敵意は無い。

その刹那、視界が黄白の色に染まる。

形容しがたい浮遊感。

反射的に、俺は半ば封印している、技の名を呟く。

空中に上がっていたらしく、浮遊感はまだ収まらない。

右手に持った大剣に、その黄白のエネルギーが吸収される。

張り詰めた空気が消滅したような気がした。

状況を理解し、俺——レットIIフォードフィールド——はこう言う。

「ふう……危なかった……。魔族か？ いや……そんな事、この際どうでもいい。
よく分かんないけど……不意打ち狙うって事は、敵だよな？ じゃあ……依頼には無かったが戦^{やる}か」



私は目を疑った。

私の魔法をかき消す剣なんて、この世には2つしかない。
レットは何も知らないハズ。……なら、答えは一つ。

目の前の仮面の男の持つ剣は、紛れもない、あの剣。

そして、髪の色……剣術、雰囲気。

……なら、答えは一つ。

黒い煙を発し続ける私の杖——闇鬼神の欠片——を下げ、捜し続けた親友に、一言、告げる。

「サイカ……なの？」

仮面の男は逡巡を見せる。

両手の剣を鞘に仕舞いその仮面に手を伸ばす。

心臓の音が異常な程大きく聞こえる。

だが、聞こえた音はそれだけじゃあ無かった。

「……ああ」

男の——サイカ・フランクスの、短い答え。

仮面の下の顔は、3年前に比べて大人っぽくなって居る。
まとう雰囲気にも、僅かだが確かな違いが隠されていた。

私——フォルテミッドナイト——は、目から零れる熱い滴を、止める事はできなかった。



「私を……私を、貴方の旅に連れて行って下さい!! 家事でもなんでもしますから!!!」

傷があるなら治しますから!!!! 私をここから、出して下さい!!!!」

彼女——ルアⅡスクリッド——は、涙を流し、俺に懇願する。

こんな事を言われて断る人間など、この世に居るだろうか?

いや、居ない。

堅くしばった唇を開け、彼女に、俺はこう告げる。

「……言われなくとも、この町からルアを連れ出すつもりだった。だから、泣くな。周りの声にウンザリしたんだろ? 俺も同じさ。

……一緒に、行こう……」

この言葉は嘘じゃない。

いや、自然と口が開いた、と言うべきか。

普段はこんな事、言わないのにな。

境遇が似ていたからか?

そんな理由じゃない。

町で一人浮いている少女は、ただただ嗚咽を漏らす。

俺はそれを両手で抱きしめた。

そして肩に手をやり、一緒に立たせる。

そして、ルアは俺——カルマⅡブルーム——に、こう告げた。

「……ふあい……!!」

消え入りそうな程にか細い肯定の声音は、俺の耳から一生離れなかった。

続・プロローグ：四糸幻篠の憂鬱（前）（前書き）

2話目となりましたこの作品。

前回は…意味不明な点が多かったと思われる。

まあ、今回からちゃんと主人公が出来ますから。

安心…出来るのか？

続・プロローグ…四条幻篠の憂鬱（前）

僕は家族を殺した。

あの光景を、僕は忘れない。

金色の炎に包まれる、家族の姿を……。

「立てよ、この糞が！」

ごんっ！

鉄の棒が僕に容赦なく襲いかかる。

虐めと言うには少々過小な表現かと思われる、そんな状況だった。僕、しじょうましの四条幻篠は暴行されている。

「くっくっ！！！」

何とか声らしいモノを出す、痛みで声が掠れ、神経も麻痺しているらしく、足の方は感覚が無い。

「お、流石じゃねえか。やっぱり殺人鬼は違うぜ。つくく」

「！！！」

「つと、怖いねえ、もしかして俺も殺すのか？ ヒヤハハハ！！！」

「お、まええ……！！！！！」

「ハンッ！ よく声が出たな。んま、愉しませてもらったよ」

と言い、延々と僕を暴行した男は笑いながら何処かへ消えた。

「痛う……」

男が消えた後、僕は手を使い、何とか立ち上がるが、痛みのせいでどうしても動きが不自然になる。

「くっ……」

幸い、路地裏だったために、壁があり何とか歩くが、一步一步が激痛を伴いやってくる。

其処で一旦立ち止まり、右の掌を空に向けるようにして胸の前に置いてみた。

「はあっ」

短く呼吸を吐き、右手に力を集中させる。
黄色の炎が其処に灯った。

「……」

少し僕は見つめた後、手を振り払いそれを消す。

「嫌だ……僕はもう、嫌なんだ……」

誰に聞かせる訳でもなく、そう、呟いた。

この言葉を発したのが本当に良かったのかは、今はもう分からない。

ただ、其処に残る事実

「……？」

僕が死ぬと言う事と、

「!??っわああああっ——」

ごしやあっ!!

頭に響く一つの鈍い音だった。

続・プロローグ：四糸幻篠の憂鬱（前）（後書き）

何か、今回妙にシリアスですね…

そ、それに…短い、だとお…

何たる事だッ！！

…いえ、何でも無いですよ。

ええーと、プロローグに（前）ってアリか…

とか、言わないで下さいね？

続・プロローグ：四糸幻篠の憂鬱（後）（前書き）

ども、篠楓です。

まだ意味不明パートです。

まだまだ重いです。話が。

そんな訳で（どんな訳だオイ）本編をどうぞっ！

続・プロローグ…四条幻篠の憂鬱（後）

僕は死んだ。

いつもの様に「家族殺し」として暴行をうけた後、その暴行が行われた場所である路地裏から

出たら：差し詰め、すぐそこが駐車場だったのだろう。トラックに轢かれて死んだ。

そんな淡泊に自分の死の瞬間を回想を終了し、今の自分の状況について思考する。

（此処は——どこだ？…死後の世界にしちゃあ——期待はずれ、だな……）

そう考えるのも無理もないように思える。

周りの色——もとい、風景は、白一色だった。

（死んでるん、だよな…体が在る、けど、目に見えない……？）

『うん。まあ、よく気付いたね。これで、『存在の定理』は、体で実感してもらえたかな？』

変な声が頭に響いてきた。…幻篠はそれが嫌で、

（……キモッ……）

とか、深層心理の様な所で自然に勝手に思考してしまった。

『……人が話したのに、しかも初対面なのに……キモイって……』

（ん？ そんな事、言った覚え…有るけど、でも……二日酔いの感覚に似てたし……）

『いや、君、未成年だよねえ！？ 後、何で僕の正体とか、『存在の定理』の事とか聞かないの！？』

（……えー……正直メンドイよ……）

『あー、やっぱり？ 君の性格上、そうだね——って、オイオイオイオイ！ 何そのテンション！』

僕思わずツツコンじやったよ!」

(えwwちょwwおまwwwwww)

『オタク!? え!? いきなり君キャラ変わってない!?』

(な、ナンのコトやら…)

『ボケるんなら全部カタカナにしようよ!』

(…さて、そろそろ本題のお前の正体についてだが—)

『今の話の中にその話はどこにあった!?』

……どんどん話がカオスな事になってしまった。

『…まあいい。良くないけど…取り敢えず、僕の正体についてだね?』

(正体? お前は「私は神だ!」とか、やるつもりなのか? ……末期か……)

『何の話だよ! あと末期って、厨二じゃないよ!』

(何故そうはぐらかす! 僕に…僕に真実を教えてくれないのかよ!)

『むしろ話させてくれないのは君の方だよおおお!!!!!!』

『』の声の人(ツツコミの方)がとうとうノックダウンしたので、仕方なく幻籐は本題に入ることにしたが…

(んで、神様。貴方の正体についてだが、はよ教えろ。)

『!?!、君僕の正体絶対分かってるよねえ! 後、神様って分かってるんなら、そんな口調止めようよ!』

(なっ…!!?!? そ、んな……か、かかか神様だったなんて…)

『そこおおお! マジに驚くなあああああ!!!!!!』

(いやあ…神様だったとは。先ほどのご無礼、誠に申し訳ない。)

『絶対君僕を小馬鹿にしてるよねえ!? ……あーもう、キリがない……。何で僕が神様だって分かった? ……参考までに……』

(ツツコミがネ申だったから。)

『そんな理由!? えええ!? そんな理由で分かったの!?』

……結局本題に入れなかった。

最終的に、こんな漫才が3時間かかったとかかからなかったとか……

続・プロローグ：四糸幻篠の憂鬱（後）（後書き）

はい。

思いっきりぼけました。

（後）なのに、解説パートは次になりそうです。

それに短い……

感想、評価、web拍手、待ってまゝすっ！

プロローグ：存在の定理と転生（前書き）

ども！

さあ…早速ですが、

サブタイトルがヤバイ件！！

自分でつけて何いってんだ！

って気分になります…一応、

あれはテンプレのことです。はい。間違った訳では、無いのです。

プロローグ…存在の定理と転生

やっところさ本題に入れた幻籙。

(……で、お前の正体が……自称ネ申だとして……『存在の定理』とやらは何だ?)

『うん。マジメな話の中にボケを入れるのはやめようか。……で、存在の定理って言うのは

存在の力ってモノがあって、それと同じに魔力ってモノがあるって言う考え。

詳しく言えば、アイデアと言うモノがあって、それを器としてその上に存在の力と、魔力があるって言う理論。』

(ボケてんのはお前もだ。灼Oのシャナパクッてんじゃねえ!!)

『ええ、それであこの定理を言い表せないんだもおん』

(その口調ウザッ!それより……それがさっきと何の関係がある。)
『つまり、存在がある限り、君はその存在自体を知覚できるってこと』

(……まあ、その話はあとでもっとユックリ納得するとして……疑問なんだが、それを教えてどうする?)

僕はもう死んでいるんだぞ?)

幻籙が元も子もない事を質問する。

だが、それは幻籙にとって本当に率直な疑問だった。

それだけに、神(自称)の答えには興味が沸いた。

『ん?ああ……言ってなかったけ?……序盤、漫才になってたしなあ……まいいや。えと、何で

教えるのか、だって?そんなの……そんなの決まってるじゃないかっ』

(はあ!?!意味がわかんないんだ——)

『転生するからに決まってるよ!』

(はああ!?! アンタ本当に頭おかしいんじゃないの!?!)

神(自称)の本気なのか本気じゃないのか分からない物腰に憤慨し、幻籐は叫ぶ。

(なに、アンタ! 人に分け分からん事をして、変な宗教活動じみたこととして! 変な事を

教えて! いったいアンタは何なん——)

『ごめん!』

(っ! …… な、何だ …… !?!)

『ホントは…ホントは、僕が、君の家族を殺してしまったんだ! 僕の、僕の実で!』

唐突に、神(自称)は叫ぶ。

(…… は? な、に…… 言って、んの? 何で…… そんな、本物の、神みたいなこと、い、うの……?)

図らずも声が上ずる。明らかな動揺。

突然の大声に驚いただけでは無いことは明白だった。

(な、何で…… 何も言わない……?)

その言葉を決して嘘ではない、と思った幻籐の口は、自然に言葉が出る。

(この世に、神様なんてのは、居ない! 居るのは…居るのは、居るのはっ!?!)

『僕が本物だよ。…… そう、言ったじゃん』

(僕はホントに…… 死んだ、のか……?)

『そう』

(僕は、転生…… するのか……?)

『そう』

(お前が、僕の家族を、殺したのか……?)

『…… そう』

神は、さっきのふざけたような物腰ではなく、真剣な、そして自嘲気味な声で、言った。

『君は、右手から黄色の、左手から白の炎がでるよね？それは……本来、君の世界には在ってはならない矛盾なんだ。』

炎が出る、なんて、あの世界じゃ超能力よりヤバイものだから、僕はその力を君から取り除こうとした。

だって……一つの大きな矛盾は、さらなる破壊を呼ぶからね。

それに、君の器が、その力に耐えられなかったし。

でも……失敗した。世界が矛盾の力を君の力に与えて僕の干渉を拒絶し、君の居場所を……家族を、壊したんだ。

つまり、矛盾の力で君の異能は僕の……神の干渉、矛盾を遮る力を手に入れ、そしてそれが暴走して

家族を殺してしまったんだよ。

だから君に非はない。在る方は……僕なんだ。』

(……話を続けてくれ)

『……そして、各世界の矛盾が集まる世界がある。いや……矛盾が創った世界が、ある。』

その世界に、君の家族の魂イデアがあるんだ。

君の、その《矛盾の力》を得て、矛盾おも燃やせる炎で、君が、君の家族の魂を救ってくれ！

お願いだ！これはせめてもの罪滅ぼしだ！

それで君もそっちで幸せを見つけてくれ！！頼む……頼む……！！』

(……)

神の、叫びのような悲痛な懇願に、さっきの軽いノリを感じさせない剣幕に、思わず押し黙る。

幻篠の脳裏には、さっきの冷静さを欠いた自分が、焼き付いていた。

(残念ながら……僕にその話を断る理由は……無論、ない。)

……いいよ。分かった。転生、だよね……？

しかも何の説明もなしの異世界テンプレだよね？ いいよ……分かった！受けて立つ！）

『っ！……ありがとう。……いや、よし、ありがとう、君のその厨二のおかげで

その世界も君の家族も、君も助かったちゃうよ！じゃあ、最後に僕からサービス！

赤ちゃんからは面倒だと思いうから、アリア・フォーウッドって言うそっちの世界の人間に

してあげよう！それじゃあ……また、逢わないかもしれないけど……また！』

（ああ、また——って、誰が厨二じゃー！神喰らいさんになるぞ！）『なれたらね』

（ふっ……こう見えてもGOD E A O E Rのプレイ歴は長いんだぞ！）

『僕は……雷神兼戦神だから、ヴァ○ユラ系かな？』

（へえー、って僕の得意な奴らじゃないか！）

『えっヤヴェー！僕殺されるって、……あ、言い忘れた』

（？は？何を？）

『君の炎、混ぜて金色にできる機能をつけてあげるのと、僕は戦神だし、君に与える加護

に……戦いには負けない加護もあげるよ！』

（超チート！え、何それ、そんなの在りかつ！）

『う、うん。僕が言うんだから、ま、ま、ま、間違いはないよ！』

（冷や汗流してるし、超怪しいんだが！）

『あ、モウコンナジカンだー、そ、ソレジャアねー』

（いつぞやの僕のまねをするなっ！……ああ、もう……また、な！）

またふざけたような雰囲気の中、幻籐の意識は沈んでいった。

これからの受難な日々も知らずに：

（……ん？アリア？それって明らかに女の名前だろ。まあ、眠たいし、今はそんなこと気を遣ってられないけど……何か、いやな予感が……。ま、いっか……）

……うん。本当に受難な日々が、続くのです。

プロローグ：存在の定理と転生（後書き）

どうでしたか？ シリアスにちゃんとなっていますか？

ここがシリアスじゃなきゃ、後がふざけっぱなしなんで、決まらな
いんです。

まあ、基本この話、ボケ↓シリアス↓ボケ↓シリアス…ですからね。
あ、次でプロローグは終わりです。

それでは、感想、web拍手、評価、待ってます！

プロログ：女体化……からの出逢い（前書き）

またサブタイがやばい件。

何か色々混ざってるW

これでプロログは最後です。

行きますよ！

プロローグ…女体化…からの出逢い

「うっ…あ…？」

真っ白だった。

眩しい、なんてレベルじゃない。目がつぶれる。

「っおゝ…頭ガンガンする…いきなりか…」

思わずグチる。…照明弾でも使われてんのか。

しばらく目を閉じて、今後について思考する…が、頭が働かない。

痛い。メツチャ痛い。

取り敢えず、体を動かす。手について起き上がってみる。

…何か違和感があった。でも、こんな状況では思考がまともに出来ない。

段々、痛みが消えていく…様な気がする。…でも、やっと目が開くくらいにはなってきた。

「…此処は…なんて、そんな主人公みたいなこと言わえっての。異世界、ねえ…それにしても

こんな森の中に落とすかよ、普通…ううつ、頭痛え…」

二度目の取り敢えず！…何でも無い。思い出してみる。

ええーっと、僕の名前は、アリアフォーウッド、だっけ？

んで…ああ、金色の炎が出るんだな…色変わっただけで何か意味あるのか？

ま、いい。あの神の事だし、どーせ、意味ない…訳ない、だろ…多分。

…そんなこんなで…視界、オールグリーン！！思考、オールグリーン！！

よし、この体の外見は…どんなかな？

——…意外にも、楽しみにしていたアリアだったりする。

…お、川発見。どれどれ…ん？何か…あんまり変わってない…？

毛先に行くにつれて黒くなる髪は何か違うけど…後は…あ、目が赤

い。

体つきは……………。

薄々、気付いてた。

「いくら何でも、ねえ…」

因みに、僕は元は女顔だった。

それが今や…おいおい。理解できんよ、ワトソン君。

「あの神、絶対ワザとだろう。…よし、決めた。神喰らいになろう。」

その、声変わりの気配など一切感じさせない、澄んだ、鈴の音の様な声。

それに似合う、精巧な人形…いや、女神…これも何か違う。

形容するなら、僅かに幼さを感じさせる、凛々しい顔立ち。とても言おう。

そう、そんな美少女だった。

「って言うか…目線、低くっ！」

…若干、ロリだった。

元が165cmだったから…だいぶ縮んでる。うゝん…140cmくらいかな？

「あ、そうだ、力試してみよう。…何か、漫才の時に、種シードとか何とか言ってたっけ？

呼び方とか、正直どーでも良いし。…うん？何か竜巻出来た。…えーっと…逃げよ。」

アリア、奔走中！！

「つふう…足、早っ…まあ、これで遅かったら驚くけど…って、あ…裸じゃん。女子が

こんな所で裸なのは問題アリだろう。確実に。」

アリア、超淡泊!!

「ってか何で竜巻出来たんだ? うーん…まさか、低温の黄炎と、高温の白炎を混ぜたから

気圧に変化が生じて、竜巻が…はあ、その気になって解説してみたけど…テキトーにも程があるか…」

アリア、実は楽しくなってきたりする!!

「あ…：そういうえば女体化してたな…：……。…ちっちゃい…：。っ何か今頃になってショック…」

アリア、ロリを気にする!!

「はあ…何にもしてないのに疲れた…。うう…。…誰か…!! 助けて…!!」

アリア、その場にへたり込む!!

「…周りに人は…：どうやら居なさそうだね。…さて、種の実験でもしよ――」

がさがさ!!

『こんな所に、人…? って、あっ…いや…その…えーと…』

草の中から何かでてきた!!

「ん…え？人？って…あ…」

急に顔が熱くなった。

何とも形容しがたい——屈辱？恥辱？

兎に角、

恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい
恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい…

かああっ!!

…音が聞こえそうだった。顔が赤くなる。リンゴのそれと同じくらい——

「あう…や…え…？あ…その…：なん…っ!？」

自分が今や女子で、そして裸を見ず知らずの男に見られた。

自分が男だと何ともないのに…と思うと、なお混乱し、恥ずかしくなる。

当然、相手の顔も赤いが…今はそんな状況ではない。

混乱が混乱を呼び、その事実が恥ずかしさも招いてきた。

そこで、一つの解決策を思いつく。

——さっきの竜巻で、吹き飛ばす——

(よしっ!!)

「はあっ!!」

「へ？」

そしたら何とも間抜けな声が帰ってきた。

――刹那

ごおおっ！！！！

「え、ちょ：おわああああ！！！！？？？」

金色の炎を散りばめた様な竜巻が起こった。

男をピンポイントに狙った竜巻。

それは辺りを熱で覆い、光で照らした。

男はどこから取り出したのか、剣を持っている。

きゅいいん！！

甲高い、耳を劈く^{つんざ}、轟音が鳴り響く。

すると

熱も光も――竜巻も、無くなった。

「ふう：危なかった……。魔族^{アスラ}か？ いや……。そんな事、この際どうでもいい。

よく分かんないけど……。不意打ち狙うって事は、敵だよな？ じゃあ……依頼^{やる}には無かったが

戦^{やる}か」

そう、男は言い放ち、剣の切っ先をこちらに向けてきた。

それが、僕とレットの出会いだった。

プロローグ…女体化…からの出逢い（後書き）

プロローグ、完！！

ちゃんとそれっぽい終わり方してるし、よかった…

次から第一話ですよっ！！

そして、次から後書きにゲストが来るかも！？

感想、評価、web拍手、待ってまーす！！

第1話..《墮英雄》

いきなり剣を向けられた。

こうされちゃあ、いやでも実力、経験の差を感じる。

いくら僕に「負けない」チート能力があるからと言って……引き分け、かもしれない。

そう判断して、僕は両手をあげて降参のポーズをとった。

「あれ？意外に降参が速いな」

「こんな状況で立ち向かう方がおかしいだろう」

「まあな…って、あ…」

「？何だ？」

「いや…その、裸…」

「ん？ああ…う、上着貸せ」

「普通そんな、初対面の奴に不遜な態度はとらんがな」

「人見知りなんだっ！」

「いや違えだろ！！どう考えても！！」

「お前、変態か？」

「何訊いてんの！？違えよ！！」

「嘘って、すぐばれるんだな！」

「いやいや、嘘じゃねえよ！！」

「早く吐け。故郷のお袋さんがお前のこと心配してるぞ」

「お前本気で誰！！」

「アリアフオーウッド」

「名前じゃねえよ！！何者だって言ってるの！！」

「ただ者」

「斬ってもいいか！？こいつ、斬っても良いか！？」

「誰も居ないのにそんな口調…。厨二か…」

「ちゅーにの意味は知らんが、罵倒された事は分かるぞコラ!!!」
何だかんだ言いつつも上着をかしてくれた。
案外良い奴かもしれんな。

「で、お前は誰だ？」

僕が訊く。

僕だけ訊かれてこいつの名前は分からないってのは、不公平だと感じる。

「レットだ。レットⅡフォーフィールド。知ってるよな？」

「ん、え？あ、ああ…その…実は、僕、記憶喪失で……」

荒唐無稽な事を言ってみる。

そういう設定なんだよ！

「ああ…成る程…。だからか…。OK。分かった。憶えてないんだな？」

「ん、いや、憶えてるぞ」

「紛らわしいなお前!!」

妙に納得していたレットが大層憤慨していた。忙しい奴だ…。

でも、あながち嘘でもない。

神様と漫才してるとき聞いたからな。

「確か、王都ファービルを救った英雄視されてる龍を全て封印して魔王を倒した事で嫌われモノの英雄、《墮英雄》の異名を持つ、バカ剣士だったっけ？」

「ツッコミどころ満載だな!! 何で憶えてるんだよ!! それに、どこまで真実だ!? 後バカは余計だ!!」

「満載って…3つしかないじゃん」

「確かにそうだけどね!! そうだけでも!!」

「因みに、記憶喪失は本当だ。多分」

「多分!? 一言余計だろ!!」

「ココハドコ? ワタシハダレ?」

「お前ホントに一言余計だな…って、あ」

「？」

レットが何かに気付いた様な声を出す。

次の瞬間、視界からはレットが消え、突風が吹いた。

「みっけ!」

妙に子供っぽい、そんな台詞が後ろで聞こえる。

「ああ、成る程。…僕ヒロインみたいだな…」

其処に居たのは、信じられない程大きい、5m程のイノシシだった。

アリアは状況を理解した。

戦い——!!

「はっ!!」

レットは跳躍しながら縦に大きく剣を振り下ろした。

「んッ!!」

振り下ろしの勢いを加えた縦回転斬りを放ち、

「ッらあああ!!」

着地と同時に天へと剣閃が伸びた。

…早い…。人間業ではない…。!!
辺りには血飛沫が舞う。

『ふざいいいいいい!!!!』

レットの超剣戟を喰らったイノシシは、心なしに^{すが}縋る様にも聞こえる、奇声を放った。

「れ? まだかよ…んじゃ、バイバイ!!」

そう言っていると、剣を右肩のすぐ横に構える。

刀身が黄緑色のオーラを纏った。

レットが一瞬体を強ばらせる。力が渦を巻いてレットへと集束しているようにも見えた。

そして、それと同時に、黄緑色のオーラも集束し――

「『直斬破』!!」
ストレット

――剣は閃いた。

レットがそう叫ぶと同時に、剣は閃いた。

剣を少し引き、右足で地を蹴り、両手に構えた剣を右手に持ち、突進する。

右手首を右に少し捻り、横に剣先が向けられ、突進の勢いを乗せ、横薙ぎに振るう!!

剣の閃きは横薙ぎから突きの様に変化し、真っ直ぐ、飛んで行った。

黄緑色の剣閃は血を吹いてイノシシを貫通する。

『ふぎやあああああああ！！！！！！！！！』

イノシシの奇声は縋りから、苦痛へと変貌する。

舞う血飛沫は、雪崩の様にも見え、心無しか綺麗だ。

すぐさま回避行動をとり、血の雪崩を回避するが、それでも一滴、二滴、アリアの白い肌につく。

「う…あ…」

アリアの口からは声が、知らずに知らずの内に出ていた。

第1話..《墮英雄》(後書き)

作者「第1話終わりです、ココまで読んでくれて有り難うございます！」

アリア「…」

作者「感想、web拍手、その他、色々お願いします!!」

アリア「…」

作者「ってアリア!何か喋ろう!!」

アリア「何で？」

作者「ゲスト出演してる意味がないからだよ!!」

アリア「僕には関係ない」

作者「ちょ、最悪な態度とったよねえ!？」

アリア「ココに出されてる方が最a——」

作者「では、次回もお楽しみにっ!!」

アリア「逃走か……救われないな、作者……」

第2話：神は屍

—SIDE…アリア—

異臭がする。

吐き気がする。

記憶が蘇る。

足に力が入らない。

地面に手をつく。

思考が働かない。

瞼が重い。

体全部が重い。

助けて、ほしい——

—SIDE…レット—

戦闘が終わった。

（毎度のこと、直斬破はグロくて困る）
ストレット
ブレイン・バースト

思考加速を切りながら、そんな事を考える。

（双斬破で終わらせても良かったんだがなあ…）
ダブル

双斬破だと、剣技にしては消費する魔力が多かった。

故に、《アリア》が何をしていても良いように、残りの魔力を多めにと
っておいた。

ライフエンド
（消滅も、久々に見るな。魔物狩りの依頼はココん所入って無かつ
たもんな）

先ほどのイノシシが黒い、闇色の煙を放ちながら消えてゆく。

段々、イノシシに奪われていた視界が回帰していく。

アリアの様子が気になり、消えるイノシシの先を見た。

其処にはアリアが倒れていた。

（ん？…何故倒れて——って、あ。…血、か…？ん？よく分からんな…取り敢えず

街まで拾ってって、宿とるか。…金がヤベエ…）

お金の事を無しにしても、街につれて行くには気が引けたが、森にこんな少女一人残して置くのはそれこそ気が引けた。

何故街につれて行くのに気が引けるのかは——俺が嫌われモノ、ってことを踏まえて想像してほしい。

アリアを取り敢えず担ぐ。

（うお…ちっちゃえ…。…。…主に背が…）

肩に掛かる重圧が想像よりも軽くて少し違和感を感じた。

さっきまでの不遜な態度からは考えられ無い寝顔…もとい、気絶顔だ。

（…）

思わず見入ってしまう。

「う、ん…」

寝息が漏れた。

視線を顔から急いで外す。

（…）

また顔に見入る。

…寝息が漏れる。

また顔に見入る——

（ヤベ、楽しくなってきた！）

アリアは、見たら絶対寝ながらリアクションをとった。
軽く、楽しくなってきたりするレットだった。



「わざわざ街の裏から入って来たんだ。褒美くらい欲しいぜ…」
ようやく宿をとったレットは、金欠なのに人助けで宿をとったと言
う事を褒めて欲しかった。

「すう……。すう……。」

「さて、俺も今日は疲れたし、寝ますか」
整った寝息を立てるアリアに、レットはそう聞かせたつもりだった。

―SIDE…アリア―

（おお、これはあれか。異世界系のラノベでよく見るあのイベント
か）

『分かるんだ！！しかも君例のあの時を思い出して気絶してたでし
よ！！！！』

アリアは何もしてないのに状況が理解できていた。

最早、それは軽いチートだった。

「そうだな。でもそれは過去の話だ」

『そういう問題じゃ無いでしょ…ああ、いいや。でもその認識で当

ってるよ』

「だろうな。今度は体アリでこの真っ白空間か」
因みに服を着ていた。

よく分かんない着物と洋服を組み合わせたモノ、とでも言えば伝わるだろうか。

『…今回は補足説明をする』

「おお、無視したな。ボケてもいないのに。軽く傷つくぞ」

『君に限ってそれは当てはまらないけどね』

「…実はお前、最低だろう」

『…で、だ。君の体の事だな』

「グスン…グスン…」

『その顔で泣かれたらこっちとしては罪悪感がハンパじゃないよ…』

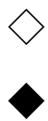
「自分で作ったのにな」

『そうだね…って、あ…』

「作った？憑依なのに？」

『……………ダラダラダラ（汗の流れる音）』

アリアはニヒルに笑っていた。



『すいませんでした…しゅん…』

「分かればいい。ただ、お前は懲りなさそうだからな」

『もうしません…はあ…』

「お前もよくやる。神、として介入して僕の肉体を作るなんてな」

『…何も、悪いことはしてn—』

「よりにもよって、女の子で。しかも自分のフェチ全開で」

『誠に、申し訳ございませんでした』

「くるしゅうない、くるしゅうない」

『萌えるよ！？ロリっていいよね！！！』

「消えろ屑神」

『う、うええええーん！！神様なのにこんな扱いだよ！！！！』

「べ、別に僕がドSだからじゃないんだからねっ！！」

『妙にツンデレっぽく言われた！！ツツコンでいいの！！？』

「この作品自体にツツコミが必要だろう」

『そういうことは言っちゃいけません。メッ！』

「もういい。…さっさと今回のことを話せ」

『え、あ、ああ。うん。えと、何で今回呼んだのかと言うと、状況説明の為、かな？』

「何で最後に？　がついたのかは置いて…予測済みの答えだ」

『だろうね。…まず、君は今レットに連れられて宿で寝ている』

「それも予測済み」

『…で、だ。…《種^{シード}》の力の使い方、知りたくない？』

「知りたい」

『なんて淡泊な…まいいや。これから一緒に修行しましょうね〜アリアたんっ！！』

「（この変態の神が…）…予測済みだ。だが、お前実態無いじゃん」

『アバター送るね〜』

「…妙に近代的だな…」

的確なツツコミだった。

暫くして、現れたのは端正なルックスの美青年だった。

「アバターって、現実と結構違うんだよね…」

「…ひどい…アリアたん、ひどい…」

「さあ〜ってと、実態出てきたし、これを練習台にすれという事か
！！」

「いきなりか！！ああ、糞！！逃げる術は…」

「ない」

「ですよね〜」

端正なルックスの美青年は…最早言葉では言い表せないルックスの青年になりました。

「なるほど。これが《鎖力》か…」

「さ、さりよく…って、な…に…？」

「存在の力っていうと、完全にパクリだから、テキトーに付けといった名前」

「へ、へえ…そう、なんだ…」

「はあっ！！」

「おお！！」

「おおっ！！ちゃんと操れる様になったぞ！！」

「そ、う…」

「さっきから三点リーダーが多いな。どうした？」

「トラウマが、増えただけ、です…」

「そうか。良かった」

「何が、良いの、だろう…」

まさにその通り。

「うむ。完成だ。ちゃんと竜巻は勿論、火球にして飛ばしたりも出来るぞ!!」

どんっ!!

「ぐほえばあっ!!!!」

「ふふふ…凄いな」

「次っ!!」

ごおお!!!!

「げべらあっしょーい!!!!!!」

「意味不明だな。リアクションが」

「ア、ア、ア、アバターが…消えるうううう!!!!!!」
ぽんっ!!!!

軽快な音と共に目の前の○○な風貌の青年(?)は煙をはいて消えた。

『しくしく…消えちゃったよう…』

「そうだな。もうこれ以上居る理由ないし、帰るよ」

『え!?! あ…そう、ですか…じゃあ、また…(何で勝手に帰れるの!?!)』

「ああ」

その言葉とともに、アリアの意識は落ちていった。

…ツツコミの嵐のような声は、聞こえなかったのだ。

第2話：神は屍（後書き）

作者…「相も変わらず、ぐだぐだEND。」

アリア…「そうだな。」

作者…「…複雑だな。自キャラに認められるのって…」

アリア…「…複雑だな。作者さんと語れるって…」

作者…「…」

アリア…「…」

二人…『何だこれ！！最後までぐだぐだだなオイ！！！！』

そんな訳で感想、評価、web拍手、お待ちしております！！！！

第3話：今の、自分

◇SIDE…アリア◆

「ふぁーあ…ふう…」

随分おかしな夢を見た気がするな、と思いながら、朝の日差しが誘惑に耐えきれず伸びる。

窓から入る光が心地よい。

（久しぶりにこんなに寝たな…）

妙な感嘆を交えつつ、転生1日目の朝を迎える。

「あゝ、えっと…ベッド…？えと…あ、あれ？」

…もともと、転生1日目だと言うことを、本人は憶えて無いが。

「んゝつと……。…眠い…」

思わず吐いたその言葉は、本心なのだろう。

（ああ、思い出したぞ。…女子化は…直ってたりしませんよね…）
思考しつつ、ベッドからモゾモゾ這い出る。

がちやり…

「ふえ？」

予想外の金属音に変な声が出るが、今はそんな事気にして居る場合は無かろうと思い、無視した。

かかっている布団の様なナニカを引きはがす。

「其処には黄色の一枚のメモと、金色と白を基調にした武器っぽい何かがある…」

…地の文の役割とられた…（泣）

それはともかく、

「メモってより…手紙だな、これ。んと…どれどれ…？」
すかさず中身を拝見するアリア。
意外にも日本語で書かれた文章は、

ども。神です。君がまだ話の途中なのに帰るから手紙を書いてみた。
…まず一つ。ココにある武器は『フォルティム』っていう、なんだ
か凄い武器。

使い方は僕は知らない。知ってても言わない。

…使い方しか話さなかった君の種^{シード}だけど、それは…君で言う、鎖力
を燃やす炎なんだ。

鎖力って…この世に存在をとどめておく鎖、って事でしょ？だから
鎖力…納得納得。

因みに、君の魔力量はこの世界の人間の平均の約10000倍有る
から。頑張って制御してね。

あ、それと、咎は普通の剣や魔法じゃあ倒せないんだ。

倒せる方法は、鎖力を燃やす君の炎とそれからもう何個があるけど
…関係無いよね。

それからこの世界について。

この世界は…技術レベルは君の世界の中世ヨーロッパぐらい。まあ、
テンプレどおりだから

君の予想でだいたいあってるよ。

んで、この世界は、魔力の他に、^{スキルパワー}技量^{スキル}つてのが有るんだ。

スキルパワーがあるから、当然スキルもあるよ。

スキルって言うのは、鎖力に干渉しないで魔法みたいな事を起こす
事のこと。

…今はまだ、この説明の意味は分からないんじゃないかな。
でも、君のチートな頭脳じゃ分かるかもね。

あ、そうだ。この世界にも国って有って、68ヶ国あるんだ。

その中でも有名なのが『ヴェスト帝国』なんだ。…あんまり、入国は勧めないけど。

理由はさ…『帝国』ってつくとか何か悪そうじゃん？

そもでもって、今君が居る国は『アイル共和国』。

比較的最近に出来た国で、『人魔戦争』の中心になった国。

人魔戦争での資源の枯渇が深刻な問題になってるんだ。

それによって出来た、人々の「負」の面が「矛盾の力」によって具現化されたモノが…咎なんだ。

大体、言う予定だったのはこれくらいだったかな？
んで最後に…

と、書いており、

丁度ココで3枚目の紙のスペースが無くなって4枚目に目を移すと…

「『愛してるよ、アリアたん』…一体全体誰からの手紙だ？そりゃ？」

なんと隣にはレットが居た。

「！！…レ、ット、ですか…ビックリした…」

「何故に敬語…まあ、いい。…誰からのだ？」

「え、えと…お、憶えてないっ！！」

「…そうですか」

呆れられた様な顔をされた事に、正直理不尽さを感じたアリアだったが、こちらからも質問する。

「…何故訊く？」

「…信用ならないからだ」

「成る程…で？」

大きく過程を飛ばした質問だったが、レットは向けられた1文字の問いを正しく受け取った。

「…ああ。察しの良い奴だ。…話すこと、有るだろう…？」

「……」

沈黙が宿での朝を包む。

が、アリアは直ぐさま口を開いた。

「ああ」

その単純明快な答えは、レットの疑惑をさらに深まらせる。

（…何故だ？アスラではない、とすれば…普通は、と言うか、記憶喪失が仮に本当の事だった

としても、「ない」と答えるだろう。ならば嘘か？いや…そんな魔力の波動は、ない）

魔力の波動、通称——「魔力波」は、個人の持つ魔力の波長を表す。魔力の波長の違わないと、魔力を別のモノに変換させて放つ「魔法」は効かない。

魔力が放つ波動が同じだと、「同調」という現象が起き、「同調消滅」が起こる。

同調消滅については——説明するまでもなく、字の通りの意味だ。つまり、波長の同じな二つの魔法は世界から「一つ」のモノだと認識される。

それによって、「同じ」になる、つまりは「一つ」なのに「二つ」だから、合わさり、消滅する。

話は逸れたが、魔力の波長は感情によっても変わる。

たとえば、「怒り」ならば基本的に魔力波が高くなる。

それによって、嘘をついた時の「罪悪感」、「自己嫌悪感」、仕方がない、と言う「諦め」

の——魔力波が低くなる感情によって、嘘をついた、と認識できる。

が、アリアには少しもそんな波動は見受けられない。

変わらず、むしろ綺麗な波長を見せている。

これは「自分の感情をコントロール出来る」とか言うものでは無いだろう。

人間にはそんな事、出来るわけではない。

ついでに、魔法を行使している気配もない。

人間ではない、と言う仮説が今もとても有力的だが、魔族には特徴アスラがあつたのだつた。

- ・耳が尖っている

- ・肌が浅黒い

- ・魔力の波長に人間には見受けられない特徴をもつ

という三つだ。

一方アリアは

- ・耳は普通

- ・肌は普通、むしろ純白

- ・人間と同じ波長

で、何一つ当てはまらない。

「変化魔法」の類ではないだろう。

さっきも言ったが、魔法の気配はない。

疑惑はいつまでも出るが、全て可能性が低いのだ。

魔族は3年前、ほとんど一掃した筈。

それでも生き残りはいて、レットを襲う事もあつたが、その可能性も低い。

――では何故あんな所に裸で？

――何を話すというのだ？

と言う事になる。

だが、今は特に敵意を見せていないので、直接訊いた訳だ。

「何をバカな…」と思う方も居るだろうが、実際レットの判断は間違っていない。

いつまでも考えていて、殺されたりするよりは、よっぽどマシだろう。

そして、大きく溜をとったアリアは、一言、口にする。

「では、訊きたい事とは何だ？」

「分かって無かったのかよっ!!」

レットは憤慨して、つい隣のお客の事を無視して大声をだす。

「ほら、質問しろ。憶えてるモノなら答えるが」

「いやいやいやいや!! 其処は普通何か…こう、壮大な過去とか、そんなの話すだろ!!!」

レットのやや的外れな、しかしある一面、的を射た叫びが静寂をかき消す。

そこで、何か諦めた様な顔をして、レットは唸った。

「…っあ…クソ…こいつ、話がつu…」

「通じるぞ」

「お前、人を混乱させるのそんなに楽しいかっ!!!」

ケタケタと笑うアリア。

人をくった様な笑いの中に、憎めない何かがあり、レットはさらに混乱する。

完全に諦め、当たり障りの無い質問から始める。

「…もーいい。歳は分かるか？」

「アリアⅡフォーウッド、16歳です。趣味は、嫌がらせです」

「……」

「ごめん。僕が悪かった。反省する気は無いが」

「こいつう…」

膝の上でギリツと拳を握るレット。

「…お、オーケー。名前と歳は分かるんだ。住所は？」

「憶えて無いな」

「そうか」

因みに、ここはアリアは「嘘」を言ってる事になるが、神様のチー
トのおかげで、この手の
事については自分から話さない限り、ばれる事は無い。

「この国の名前は？」

「あいるきよーわこく」

「発音に大変な間違いがあるが、まあよし。…其処の武器は？」

「ふえ？」

今日二回目の「ふえ」が出るものの、『フォルティム』の事をすっかり失念していたアリアには
聞こえなかった。

「えーっと…『フォルティム』っていう武器」

「な…ッ！…！」

レットの顔に動揺が走る。

尋常じゃないその様子に、不謹慎だがアリアは少し興味を引かれた。

「どうした？」

アリアは素直に問うが、よろけながらも近寄り、レットは『フォル
ティム』を手にする。

「これは…やっぱり、あいつの…ユニムの、設計した…」

レットの震える背中には、「何か」が、しっかりと書いてあった。
アリアは「それ」をしっかりと、正しく読み取り、一言、口にする。

「何があった？」

すっかり聞き手と問い手が逆になったが、致し方の無いことだろう。
そこからすぐに我に帰り、自分の正直な今の答えを、アリアに告げる。

「すまん。話す気には、まだなれない」

「…」

寂しさを感じさせる笑みを浮かべた顔で振り返るレットに、アリアは何も言えなかった。

第3話：今の、自分（後書き）

作者様 「完全に説明パートだね」

アリア 「確かにな。ところで、何故に作者『様』何だ？」

作者様 「今後の展開についてだけどー」

アリア 「逃げるか…。何が『様』だよ」

作者様 「色々『様』何だよ」

アリア 「そうか。…感想、評価、web拍手、待ってます」

作者様 「それ、こっちの役目…」

第4話：不安と月夜と決意の夜（前書き）

アリアがかなり不安な事になっています。

元気出せよ！！！！（笑）

第4話…不安と月夜と決意の夜

◇SIDE…アリア◆

（ああ、こいつ、昔に何かあったんだな…）

僕は直感でそう思った。

それが、僕と似てて…いや、同じで、既視感すら憶えた程だ。

その日は、実にあっけなく終了した。

あの後、宿の部屋から出て、1階の食堂の様な所に行き、朝食を採った。

その時にはもうレットの様子は元に戻っていて、普通に他愛もない会話をした。

当然だけど、服を貰った。

黒いベストに、桃色っぽい赤のTシャツ。

紺色のカーゴパンツと、宝石のついたベルト。

若草色の、手に着ける、布の手甲。

どれもあっちと違う、新鮮味を感じる。

それから…恥ずかしいけど、下着も貰った。

其処のことは、恥ずかしいからご想像に——ま、任せないけど、言いたくない。

そうだ、僕は暫く一緒にレットと旅することになり、これから本格的に戦いが始まるらしい。

その時に気付いたんだが、ここの時間はあっちと一緒だ。

一日24時間。

今の季節は日本で言う『初夏』。

ここは王都ファービルからかなり離れた田舎の方。

知識としてはこのくらいで十分だろう。

それと、明日の朝からレットに稽古をつけてもらう事になった。

何でも、『その異常な魔力を放っておくには勿体ない』だそうだ。それから、これからの旅の予定も決まった。

レットも『咎』を倒したいらしく、3年前の仲間を捜すらしい。

当然、僕もついて行くのだが…少し不安かも。

…あっちの世界じゃあ、色々あったな。

全然寂しくない、って思うと思ってたけど…何でだ。
少し寂しい。

小学校の時は、クラスメイトから虐められ、
中学校でも先輩、後輩、同級生問わずに虐められ、
高校はおかしな集団も僕をつぶしに来た。

でも、その中でも、友達はいた。

だけど、友達とは呼べなかった。
僕は「違う自分」を演じていた。

僕にだって「自分とは呼べない自分」で、「友達とは呼べない友達」
がいたんだ。

それが正しかったのかは、もう知らない。
知る術はもう無い。

それが、なんだか少し寂しい。

夜だからかな。

僕らしくない考えが、いっぱい、いっぱい、頭をよぎる。

これは…きつと、不安。

未来に進む事が凄く怖い。

神は「幸せになってくれ」なんて言ったけど……出来ないよ。
僕には、幸せになる資格なんかないよ。

頬を伝う涙も、時々聞こえる鳥の囀りも、夜の月明かりも。
全部、拭い去れる位、強くなりたい。

ははは……なんだろう。

ホントに僕らしくないや。

でも、ホントの僕ってなんだ。

忘れちゃった。

そうだ。明日はギルドに行くんだ。

ギルドカードを作って、依頼を受けて、報酬をもらう。

どれもテンプレどおりだ。

つまらなくは、当然、ない。

でも

何か、足りない。

満足出来ない。

何でかは知らない。

……僕自身が、これ以上、考えたくない、言っている。
だから、じゃないが……話は変わる。

レットの身長は訊くと178cmだそうだ。

気付いたとは思うが、単位もあっちと一緒だ。

僕の身長もレットの顔の半分くらいまでだから——150くらいだ
ったのかな。

あんまりロリじゃなくてよかった。

胸は——残念だが……。

まあ、致し方無いのだろう。

顔も美少女だし——ってまで……！元の顔とあんまり変わってない

から、それは言ったら駄目だ！！！！
ふう…女顔ってやだったんだよ…

…駄目だ。

目的を見失うな。

僕は、家族を救うんだ。

そう、『咎』を…

『咎』…ヒトの「負」の面が矛盾の力によって具現化されたもの…
その「負」の中に、父さんが…母さんが…林檎が…
まだ僕は弱い。

——でも

…決めたよ。

早く、強く…『咎』を…救える位、強く…

僕らしくなくても、それも僕だ。

僕じゃないと言う過去も否定したくない。

だから…この、能力で…炎で…『フォルティム』で…！！！！

この思いの火種を…

全てを焼き尽くすほどの業火に変える！！！！

今は、それだけで…十分だよね…

この…くらい…決意、で…

第4話：不安と月夜と決意の夜（後書き）

作者様 「おお、アリア成長したね」

レット 「うむ」

作者様 「自分で言うかよ…って、え？」

レット 「ん？どうした？」

作者様 「レ、レット！？」

レット 「な、何だ、急に…」

作者様 「い、いや…何でも…」

レット 「おう。そうか。って事で、感想、評価、web拍手、待ってるぜ！！」

作者様 「レ、レットにも盗られた！！！！う、うええーん！！

存在意義無くなったよ！！！！」

登場人物紹介

アリアⅡフォーウッド

性別…女

年齢…16歳

種族…不明

身長…150cm程度（本当は143cm）

能力…黄金炎

属性…闇

武器…フォルティム

魔力…一般人の一万倍

詳細…昔、黄金炎の暴発で家族を殺してしまった。

それにより周りから虐げられるようになり、同時にヒトを嫌いになってしまふ。

が、「自分」で、「自分」を演じる様になり、内面を見せなくなつた。

一度決めると最後までやり抜く性格で有るが、努力をしなかったのであまり陰はない。

レットⅡフォードフィールド

性別…男

年齢…18歳

種族…人間

身長…178cm

能力…種《創造神の加護》

属性…無属性

武器…絶龍剣・エターナル

魔力..高い

詳細.. 3年前、世界を救った勇者。

だが、王都を守った守護龍..火龍、レッドドラゴンその他全8体の龍を

エターナルに封印し、『魔王』を倒した為、都民から反感を
買うように。

さらに、魔王を倒す瞬間が魔法によって全世界で見られた為、
戦いぶりが酷く、さらに何かあったらしく、『堕英雄』と喩
々された。

『フォルティム』の事を知っているらしい。

神

性別.. | 不明 |

年齢.. | 不明 |

種族.. 神

身長.. | 不明 |

能力.. | 不明 |

属性.. | 不明 |

武器.. | 不明 |

神力.. | 不明 |

詳細.. 雷神と戦神を兼ねている恐らく偉い（エロイ）神。

『インドラ』とも言われた。

ロリ属性である。

リコルフアウンド

性別.. 女

年齢.. 19歳

種族.. 人間

身長.. 164cm

能力.. | 不明 |

属性.. 火属性

武器.. 焰大剣・アギト

魔力.. 高い

詳細.. アルビオンの受付嬢兼ギルドマスター。

活発で明るい性格の持ち主だが、その実、飄々として鋭い性格でもある。

サイカの動向を知っているらしい。

ユニム・ユーマール

(3年前)

性別.. 女

年齢.. 15歳

種族.. 人間

身長.. 156cm

能力.. | 不明 |

属性.. 無属性

武器.. 無し (鍛冶士)

魔力.. 高い

詳細.. 3年前、レットの剣を鍛えた者。

その後の事はレットの口からいつか語られるだろうが、今は何も語ってはくれない。

サイカ||フェランキス

(3年前)

性別.. 男

年齢… 14歳
種族… 人間
身長… 154cm
能力… —不明—
属性… 雷属性
武器… 双神剣・ディストーション
魔力… 高い
詳細… 3年前、レットと旅をした仲間。
『魔王』を倒した後、動向が不明。

フォニア・レットル

性別… 女
年齢… 16歳
種族… 人間
身長… 142cm
能力… —不明—
属性… 炎
武器… エスペランサ
魔杖・刃？

魔力… 結構高い
詳細… 3年前、クレスと一緒に作ったパーティ・道化師の真似事、リーダー。

国から指名がくるほど有名な冒険者パーティのリーダーであり、その信頼は絶大。
レットの事を心の底から尊敬している。

クレス・リチュート
性別… 男

年齢.. 18歳

種族.. 人間

身長.. 176cm

能力.. |不明|

属性.. 水

武器.. 氷大剣・アギト

魔力.. そこそこ

詳細.. 道化師の真似事、初期メンバー。

リコの大剣と属性違いの大剣を使う。

剣の腕は確かで、かなり修行(?)をした。

仮面は趣味である。

リコリスIIリユント

性別.. 女

年齢.. 17歳

種族.. 猫又

身長.. 167cm

能力.. |不明|

属性.. 風

武器.. 真・アギト

魔力.. 結構高い

詳細.. 道化師の真似事、第3メンバー。

リコの大剣の強化縮小版を使う。

語尾に「〜にゃ」「〜みゃ」をつけて話す。

片手剣を使わせたら右に出るモノはない、と言われる程の力量。

GL気味で、よくフォニアに抱きついたり撫でたりして愛でている。

……まあ、フォニアは顔を赤くして満更でもなさそうなので、

みんな見て見ぬフリをする。

ラセツ・T・ドクロ

性別..男

年齢..16歳

種族..人間

身長..165cm

能力..|不明|

属性..雷

武器..双刃銃・ガント

羅刹の剣・サクリフェイス

雷鎚・トール

etc.....

詳細..道化師の真似事、第4メンバー。

ある日突然もの凄く強くなり、複数の武器を使って敵を倒す方法を編み出す。

実は、かるーくフオニアの事が好きだったりする。

異名は「切り裂き猫^{ダガーキャット}」。

第5話：白亜の騎士

「えと……こ、此処が……ギルドですか……」

「ん？ ああ、そうだが……何か問題あるか？」

「い、いや……その……」

「？」

「シュール過ぎるだろッ!!」



事は2時間前。

何故だか湿っていた枕をダ○ビッシュよろしく、吹き飛ばして飛び起きた僕は

右隣でグースカ寝てる英雄サマを蹴り飛ばし、「修行はどうした！」

！」と言い、

宿の無駄に広い庭で僕の四条流の双剣術を簡易木刀でレットに盛大に披露した後、

あらかじめ言っていたギルドに僕も入る為に町に来た。

……と、一息でそれっぽく言ってみた。

四条流の剣術は、僕の異能を知った父方のお爺ちゃんが教えてくれたモノだ。

「異能も使えて剣術も使えるのは格好いい」かららしい。

更に、「普通じゃ格好悪いから」と、二刀流。

まともに使えるまでに3年ほどかかったが……まあ、最終的には

「弱冠8歳で剣道界に革命を起こした男の子」として話題になった

程だ。

正直、「家族を殺したのは弱い自分」だったとその時は思っていたから、

「少しでも強くなる為に」と学んだ、あまりいい思い出の無い剣術だ。

それにしても、この体のスペックは高い。

木刀がもの凄く軽く感じられる。

「剣の振り」のリズムが何時もの2倍、3倍の早さで拍を打っていた程だ。

それを見てた英雄サマは拍子抜けしてたがな。

そんなこんなでお昼頃だから外で何か食べようや、と言う話になった。

そのついでに僕をギルドに登録しよう、と言うことにも。

で、簡単に準備して僕たちは宿から出た。

気付いた事だが、こないだ神様の所に行った時に着ていた服とレットから貰ったこの服は

全く一緒だった。

少し大きい気がするが、特に問題は無い。

それは兎も角

この町——エル・ターミナルは、僕の天敵だ。

テンプレ過ぎて、ヤバイ。

何だこれ、頭痛くなる……。

中世ヨーロッパ的町並み、石作りの壁、アニメカラノベでしか見な

い色とりどりの

髪の毛の色（金髪で毛先に行くにつれて黒くなってく僕の髪じや言えないケド……）

そしてコスプレ的服！！

何かもうちょっと意外性があっても良かったのに！！

ちよっと残念だよ！！！！

と、思いつつ僕たちはギルドへと向かって行った。

ちよっと歩いた後、遠目から見て「おかしな建物だな」って思う建物が、そこにはあった。

壁は真っ白！

屋根も真っ白！！

って言うか全部真っ白！！！！

このギルドの名前、「アルビオン」って言うらしい。
アルビオン——『白亜』って意味。

周りは中世ヨーロッパ。

目の前真っ白。

此処どこ！？

異世界ですか——って異世界だけど、そうだけど！！

何か——

「シニール過ぎるだろッ！！」



此処で冒頭に戻る。

これはこれで意外性はあるけど、僕はこんなの求めて無い！！

あるよねこう言うこと！！

自分の望みが度を超して叶えられてる事！！

ある意味不条理だよね！！

と、勝手に自分で混乱してたら、レットが

「行こーぜー」

と急かしたので、半ば不本意だが、その異常とも思える白さの扉を開いた。

中には明らかにガラの悪そうな人たちが居る——訳では無く、10代、20代位の

若い男女が、丸いテーブルを囲み、雑談を交わしていた。

外観は真っ白だが、中は木の板を貼り合わせた床や壁で『如何にも』って感じた。

左側はカウンターのようになっている為、受付などは此処で行うのだと分かる。

ちょうどそこには見るからに活発そうな女の方が一人。

長い赤い髪を横でまとめている、確かサイドポニーなる髪型だった。

「あ、レット君？来た来た。仕事の方は？」

「あゝ……すまん。倒したんだがな……剥いで来るの忘れたわ」

「あら、珍しい。君がミスるなんて」

「たまにはそんな事もあるよ」

「……ところで、その娘は誰？」

「……僕？」

二人の話を静観してたのに、急に話を振られた。

「ああ……こいつはな、依頼のイノシシ倒すときに居たやつだ。記憶喪失らしい」

「記憶喪失……？うさん臭いわね……。レット君は嘘つく人じゃないし……」

「俺の能力、忘れたか？」

「あ、ゴメンゴメン、忘れてた。……ふーん……ホントに何も覚えて無いんだねえ……」

……？

今の会話には少しひっかかった。

レットは今「俺の能力」と言った。

何か言っていない事がレットにはあるんじゃないや……

と、赤い髪の女の人は僕に握手と自己紹介を求めた。

「私はリコルフアウンド。見ての通り、アルビオンの受付嬢をやっているの。」

宜しくね。貴方は？」

「僕はアリア・フォーウッド。さっき言ってたけど、記憶喪失なんだ。宜しく」

僕はそう言うとりこさんと握手をした。

「で、レット……俺の能力、って何？」

「あら、レット君言って無かったの？」

「う……いい、いや、その……」

「言いにくいかな？」

「いずれは言うべき何だから……でも……」

レットは頭を抱えて唸りだした。

……一体何なのさ……

5分ほどその状態で居ると、「わーったよ！！」と逆ギレしながら諦めてきた。

……つくづく面倒な奴だ……

「俺はなんと言うか……シーデイス種保持者なんだ」

「シーデイスト？」

此処でまた変な言葉が登場。

説明、求ム

「種、シートって言う神から与えられる加護を持ってる人たちの事」
リコさんが説明してくれた。

「それはいいとして……って言うか僕も持ってるし……どんな種なの？」

「俺の種 능력は——ってえええっ!!?」

「何か？」

「いやいや、何か、じゃねえっ!!何さらっとなシーデリストである
こと言ってるの!!」

「それが、ならどうだ？」

「リアクションの問題じゃねえ!!」

「人生、リアクションは大切だよ」

「そうかもしれんが今は確実に違う!!!!」

「と思いきや」

「まさかの大どんでん返し!？」

「……——じいっ——……」

「はっ!？何お前はおもしろそうに見てるんだよ!!」

「いや、レット君のリアクションがおもしろいからつい……」

「つい、じゃねーっ!!!!」

ツツコミのせいかレットの息が上がっているの、この辺にして
おこう。

「うん……僕の種から言おっか」

「ん……」

突然の事にも驚かず、二人はこっちを見た。

「僕の種は……こんなの」

右手に黄色の炎を点し、左手に白い炎を点した。

レットは「ほー」と言い、リコさんは感心したのかしてないのか分
からない目で僕を見る。

「で」

短く間をおき、両手を合わせる。

きいん、と、甲高い音がしたが、すぐに2つは溶け合い、金色の
炎を作る。

手には不思議な感触と雰囲気伝わっていた。

「これ、黄金炎。僕の種はこの炎を作る能力」

「ほへー……効果は？」

リコさんが訊いてきた。

でも、僕はよく知らないので分かる事だけを伝えた。

「普通じゃあ燃やせないモノを燃やすチカラ、かな？」

「っ！……！」

レットが食いついてきた。

『フォルティム』の時と同じ顔だった。

「まさか……その炎……咎を、燃やせたりできるのか……？」

「ん……分かんない。やってみないと」

「……？ 咎を知ってるの……？」

リコさんも食いつく。

何か怪しまれてるみたいだ。

「ああ……何か、『咎』って存在があることは覚えてたんだ」

「ふう……ま、嘘じゃあ無いんだからいいけど……」

と、言いつつも何処か煮え切らない様子だ。

「で、レットの種は？」

「う……忘れてくれればいいのに……」

「この僕が？」

「はあ……もういい。俺の種は――」

まだレットは躊躇っているようだ。

だが、その躊躇いを断ち切るように、目をつぶって間を置き、言った。

「――俺の種は、種シードを作る種。通称『加護シールドメイカーの作り手』だ。」

レットの後ろには「うんうん」と言った様子で頷くリコさんが居た。

第5話：白亜の騎士（後書き）

作者…「明けましておめでとうございます」

アリア…「今年も宜しく願います」

作者…「1月1日に更新…：よっぽど暇なんだよね」

アリア…「自分の事を何で他人のように言う…：」

作者…「だって他人だもん」

アリア…「おいコラ！！そこで意味深なフラグたてるな！！！！」

と言う事で感想、評価、web拍手、まってまっす

第6話：創造神の加護

「――俺の種は、種シードを作る種。通称『加護シールドメイカーの作り手』だ。」

一瞬、意味が分からなかった。

でも、それは意味を理解している確固たる証拠だとも思えた為、無視する。

種を創る？それって……恐らく、最強だろう。確実に。

喉のずつと奥の方で喚いている音を、僕は声に出す。

「それって……自分の好きな種を創れるとかそういう――」

「ん？ああ、その通り……。一応制約は有るが……現在最強の種だ。これは世界に知れ渡って無い情報だから……あんまりヒトに言いたく無かったんだ……」

「まさかの現地チート英雄が居た！！嘘！！誰得だ！！！」

「こら、周りにもギルメン居るんだから、静かにするの」

「リコさん！？何で僕子供扱いなの！？って言うかレットの話聞い
てノーリアクション！？」

「知ってたもん。あと、アリアちゃん背低いからねえ……」

「それを言うなッ！！っていうかやっぱりか！！僕ロリか！！」

「あれ……レット君、身長について、嘘言っただしょ」

「うぐ……バ、バレた……」

「って今はそんな話してる場合じゃないッ！！！」

思いつき僕は叫んだ。

……周りの人を無視して……。

「ん？何、アリアちゃん」

「今の話聞いて整然としてられるか！！最強存在が此処に居るんだぞ！！！」

「それがどうした、アリア」

「どうしたもこうしたも、お前みたいな奴が最強存在さんか！！！」

「そうだけど……何？」

「加護を創るんだぞ！！それは恐ろし——」

「お前が思ってる程強くねーよ」

僕の言葉を遮って、レットは言った。

「俺の種はまだ芽だ。^{グリーン}お前が思ってる様な効果は……ない」
「？」

「えと……説明しやすくいうと、って、グリーンの意味分かるか？」
「ん……種、たね、だからまだ芽吹いて間もない、って事？」

「そこで分かっちゃうんだな！！お前は！！！」

「それが？」

「はぁ……もう良い……。その通りだ。……俺の種は攻撃的な種じゃないからな」

「どういう事？」

「それはね」

今度はリコさんが割り込む。

「相手に直接攻撃を与える種は創れないの」

「うーん……成る程？」

「……本当に分かったのよねえ……いささか疑問だけど……貴方達も

此処に遊びに来た訳じゃ

ないんでしょ？」

「……ああ」

リコさんが言い、レットが短く答えた。

「こいつを此処に入れてやりたくて……」

「了解。まあ、そんな事だろうと思ってたけど」

「手続きって、難しいの？」

テンプレだと「血を垂らす」とかでオーケーなんだけど……どうかな？

「簡単よ。可視化魔法の応用で、人生の記録やら何やらを記録する
この核石^{アルカナ}使うの」

また聞き慣れない単語が……アルカナ？可視化魔法……？可視化魔法は何となく分かる

けど……アルカナ。ロード・オブ・アルカナでしか聞いたことない……。

「ああ、アルカナって言うのは……魔力を流すだけで決められた魔法を発動する

水晶みたいなモノよ」

「へ……でも、まあ『百聞は一見にしかず』なんて言うし……取り敢えずやり方教えて」

「手をかざしてみても
かなり簡単だった。

「えい」

僕は核石の少し斜め上に手をかざした。
しーん……

「あれ？何も起きないよ？」

「あれ？おかしいな……どれどれ……」

リコさんは僕の手を掴み、力を軽く入れた。
こお……

すると、白いが辺りを照らし、虹色の様にも見える線状の光を放つ

た。

核石はもう見えない。

見えるのは神々しい光のみ。

1分ほどそのままの状態でした。

……リコさん……そんなに密着するんですか……なんか嫌だ……嫉妬？みたいな何かが

僕の中に生まれつつあるよう……

……ってリコさんスタイル良いからって何言ってるんだ！！！！

光はやがて収まり、何ごとも無かったかの様に事は進む。

「キレイだったね……」

「まあ、みんなそう言うよ。これでこの核石に貴方の情報は刻まれたから、これからこの

カードに移すね」

「カード、か……お願い」

「うん……これで……っと」

核石と手に持っていた白いカードを、リコさんはおもむろにぶつけた。

また一瞬、さっき程では無いが光を放つ。

「これでOK。お疲れ様。これで貴方も『アルビオン』の仲間入りよ。改めて宜しく」

「うん。宜しく」

「俺とは!？」

約一名、五月蠅い奴が居るが、まあ無視する。

——この日から、僕の旅は始まるのだった——

第6話：創造神の加護（後書き）

作者…「懲りずにまた投稿しました」

アリア…「……作者としてあるまじき発言に聞こえるが……」

作者…「良いじゃん別に」

アリア…「何が……」

作者…「三点リーダー多いね」

アリア…「お前が書いたのだろう!!」

と言う事で感想、評価，web拍手などお待ちしてま〜す

第7話：災禍の予兆

ギルド、アルビオンに入った僕は、リコさんにアルビオンの概要やら何やらを教え込まれた。

まず、ギルドとは傭兵や冒険家に限らず商業者や学者までもが入って居るらしい。

が、アルビオンはそんなに大きくない為、傭兵や冒険家しか居ない。それで、ギルドで何が出来るのかと言うと「依頼クライアントの受注・発注」、それから一般人の立ち入り禁止区域の立ち入り、さらには多少の警察権も与えられる。

そのため、フリーで活動するよりも、傭兵や学者にとってもギルドに加盟した方が凄く有利なのだ。

ギルドに加盟するのは簡単。「各ギルドの加入条件を満たす」これだけ。でもまあ、加入条件の厳しい所もあるが。

このアルビオンは「パートナーカード」なるものを作るだけでOK。

何故こんなモノを作るのかと言うと、身分証明書の代わりになるし、これをメンバーや他組織の人間と交換するだけで、依頼への同行が許可される。

これはほとんどのギルドも取り扱っており、この国の王様も持っているらしい。

だが、これにはあるルールが存在する。

1つは他人が勝手に見てはいけない事。

これは個人情報を書かれているため、見ると犯罪に引っかかるらしい。

そのためか、このカードにはある術式がかけられている。

「不可視化魔法」という、「物体の情報を完全に読み取れなくする」魔法がかかっている。

2つ目はこのカードの情報を勝手に操作してはいけないこと。

さっきも言ったが、これは個人情報が書かれているモノだ。

言わずもがな、ダメな事だ。

因みに、僕のカードはちゃんと「捏造」されている。

あの神のおかげだろう。

こんな感じだ。

名前..アリア||フォーウッド

年齢..16歳

性別..女

魔力..表示不可

能力..種《黄金炎》

名声..無し

称号..咎ヲ狩リシモノ

気になる表記はあるものの、良いだろう。

……。

何故か今「良いのかッ!!」って声が聞こえたが……空耳だろう。
うん。そうに違いない。

そんなこんなで今現在……

「レット君、イノシシは狩ったらしいけど……証拠納入品のキバを
忘れたからねえ……」

「うぬ……」

「報酬ナシ♪」

「うおおおおおお!!……!!ま、待ってくれ!!半分、いや4分
の1でも構わない!!金を!!……!!」

「ムゝリ♪ダメだよ」

「ぬうう……銀貨4枚なら……!!?」

「はい、お小遣い♪」

「銅貨だど!?くっ……リコ、汚いぞ!!……!!」

「働かざる者食うべからず、ってね」

「俺は働いた!!金くれ金!!……!!」

「証拠は何処かしらあ?」

「ううっ……」

やばい、レット凄い可哀想だ……。

何だこの催眠(?)は。

……ってか僕という証人がいるのに……。

『アリアちゃん、余計なこと、言わない方が良いよ♪』

い、いや、証人なんか居ません。はい。

アイコンタクトって存外に恐ろしいものだと、そう認識せざるを

得なかった、今日でした。

「く……な、ならいいさ。俺も違う仕事でお前を認めさせるからな……!!」

「お好きにどうぞ。あ、アリアちゃん、そういえば此処のギルドマスター紹介してなかったね」

「え? ああ……ギルドマスターってリーダーみたいなもの?」
またまた出て来た新出単語。

まあ、分かるけど……でも此処で知ってたら記憶喪失なのにおかしいからな……。

「そう、そんなとこよ。で、ギルドマスターは誰かというと……」
ん? 此処に居るの? 何かテーブルを囲ってる奴ら(ざっと50人くらい)の中には

そんな奴居ないけど……。

ん? レットは選択肢入って無いのかって? あれが入る訳無からう。

「実は、」

と、リコさんの話が進む。

「この私です!!!!!!」

「へえー。リコさんだったんだ。ふうん。

だからレットへの対応の仕方が上手か——って、えええ!?!」

「ん? 何? あ、分かった!! 何で受け付け嬢がギルマスかって? 実力さ、実力!!!!」

「そうだけど!!!!!! そうだけでも!!!!!! 何かそんな感じが一切感じられないんだよ!!!!!!」

「アリア」

突如、レットが会話に割り込む。

何か結構真剣な顔だ。

意味が分からないんだが……

「こいつ、俺と同等かそれ以上強いぞ」

へ？い、いや僕よりは少なくとも強いレットより強いのか。

それは凄いな。うん。

ってリアクション僕遅いよ！！最近！！！！

一人で悶絶していると、リコさんが話かけてきた。

「そいやさ、アリアちゃん一人称『僕』だよね」

こんな事で精神を疲労させてもしょうがないので、素直に質問に答える。

「うん……それが？」

「いや、珍しいな〜って」

「そうなの？」

「うん、私の友達の中には、少なくとも居ないね」

「へえ〜。『私』に直そうか？」

「いや……その方がアリアちゃんっぽいよ。そのままが良いな〜」

「ん……なんか、ちよつと照れくさいね」

「あはは、そう？」

「うん……まあ、ね……」

なんだか、僕はこの体になってから、微妙に性格が変わった様な気がする。

1分ほどリコさんと雑談をしていると、影の薄いレットはポロポロの紙切れを

どこからか持って来た。

「この依頼で良いか？」

「あれ、いや……何々……『烏龍退治』？ダメ。アリアちゃんのLVに合わない」

「あ〜……そうか。アリア連れて行くこと前提なのか……まあ、約

束はしてたけど……」

「これよりもっと良い、丁度アリアちゃんとレット君に合った仕事があるんだけど……」

其処で、レットがキラーンと効果音が出そうな感じで目を光らせた。

「報酬は？」

「金貨50枚」

「よし請けた」

「決まり。行くときは私に言ってね」

凄い手慣れた感じで会話が進んでいた。

ちよっと、変な表現だけどフクザツな気分だ……。

「あ、そうそう。アリアちゃん」

「ん？」

リコさんが僕に話しかけて来た。

「武器は何使うの？もしかして学者希望？」

「うん。僕は双剣士、ってとこかな」

「双剣……また珍しいね……」

「へえ……そうなんだ」

「うん……サイカ君が使ってたけど……」

「サイカ？誰？」

「ああ、あいつか……。今どこに居るんだろう……。暫く会ってねえな……」

恐らく、レットの3年前の戦いの仲間なのだろう。

同じ双剣、二刀流か……。会ってみたいな……。

「……サイカ君……。何で君は……」

僕はそんな事を考えていて、リコさんの声には終ぞ気がつかなかった。

そのやりとりからをしてから、僕たちは昼食を食べて無いことに気がついた。

レットによれば「この辺に美味しいメシ屋がある」らしい。

まあ、僕にはその変の事は全く知らないので、言われるがままについて行った。

そこで僕はこの世界の料理に対して深いトラウマを持つのだが、それは秘密である。

第7話：災禍の予兆（後書き）

作者…「微妙にフラグがあるね」

アリア…「ああ……誰だよ、サイカッて」

作者…「ネタバレ発言になるね」

アリア…「む……訊きたかった……」

感想、評価、誤字脱字の指摘等、待ってまゝす

第8話：魔力の使い方

現在、僕たちはラルム高原へと向かって歩いている。

昼食を摂った後、リコさんから改めて依頼の内容を説明された。

『ラルム高原に出没するゴブリンの群れの討伐』

が、依頼の内容だ。

ラルム高原とは、エル・ターミナルより1km程離れた、山の麓の方にある高原地帯だ。

それなりに広く、絶滅危惧種なども生活をしているらしい。

故に、今回の依頼はかなりの重要任務であり、国から報酬が出てい
るようだ。

レットは目を『¥』のマークに輝かせながら、意気揚々と歩いて
いる。

そういえば、僕は魔法の使い方を知らない。

って言うか色々分からない事がある。

しょうがないので、目の前の英雄（笑）に訊いてみよう。

「なあ、レット」

「ん、なんだ♪」

「魔法の使い方とか、魔力の制御の仕方を教えて」

「あゝ……そういえば、あの核石の時も魔力を流してなかったけ
……」

レットはしばらく黙考した後、一言告げた。

「もち、教えるよ……その魔力は凄いからな……」

「そうなのか？僕には魔力が分からないからさっぱりだ」

「あ、自分の魔力が分からないのか？」

「ああ。もちろん」

「ってそれを自慢げに言わないと思うぞ、普通……。まあ、いいと
して」

そこでレットは話を区切った。

「いったん止まって、全身の力を抜いて」

おそらく、これは「魔力を感じる」訓練なのだろう。

「そして、体の内を流れる力を感じる」

僕は言われた通りにしてみる。

全身の神経が感じられるような気がした。

冷気が体を通り抜ける。

そこに、管のような暖かい流れを感じた。

「そうだ、それだ」

レットの声に僕は疑問を抱いて、脱力をやめた。

「そういえば、レットは分かるの？」

「ああ、そういう《種》を一時的に作れば分かる」

「へえ……便利だな」

「まあな。あ、魔力は感じたか？」

「ああ。直感的に魔力だ、って分かった」

「おお……なら話は早い」

そう言くと、レットは両手を上に上げた。

「手のひらにそれを出現させるイメージをその流れに乗せてみる。

おもしろいぞ」

レットはそう言った後、手のひらの上に光球を作った。

少し驚いたが、すぐに「やってみろ」と言ったので、言われた通りにする。

えーと……何々、まずイメージするんだな……。また随分と抽象的だな……。

イメージが、「魔力」に乗った気がした。

すうっと、何かが手のひらに向けて抜けていく。

すると、手のひらの上に闇色の光球ができた。

「おお、何か凄い」

「うむ。これを、イメージするモノを変えれば簡単に応用できるぞ」
「存外に簡単だね」

「うゝむ……俺はかなり習得するのに時間がかかったが……」
なるほど、これもチート能力なのか……。

しばらくそのままで居ると、僕はこの光球の色がレットと違うことに気がついた。

「あれ、そういえば色がレットのと違うね」

「あ、忘れてた」

一瞬口を開いて、その緩んだ顔を更に緩ませた。

「この光球の色で得意な属性と苦手な属性が分かるんだ」

僕の光球は黒と紫を混ぜた闇色、と言った感じだが、レットは黄緑色だ。

たぶん、僕の属性は闇。

レットは雷が無って所だろう。

「アリアは……。や、闇属性だな……。あはは……」

何故だかレットの顔が引きつっている。

もしかして、闇属性は迫害対象だとか？

「ああ……。何で俺の周りにはこう言う闇属性の恐ろしい魔法使いが居るんだ……？」

「僕は魔法をあんまり使わないけどね」

どうやら違ったようだ。

「レットの属性は何？」

僕は二択で迷ったので、直接訊いて見ることにした。
おそらく無、だろう。

「お前なら分かるかも、と思ったんだがな」

「《雷》か《無》で迷ってね」

「……。ビンゴだよ……。俺は無属性だ……」

何故かレットはゲンナリしていた。

予想的中！！いえーい！！！！

って事は、大体こうかな

桃色…炎
群青…水
黄色…雷
橙色…地
新緑…風
茶色…木
肌色…光
闇色…闇
黄緑…無

ってキレイに並ぶ。

「まあ、アリアの事だから、他属性の色も分かるよな」
僕は素直に、更に全力で笑って答えた！！

「うん！！」

桃色が炎で、
群青が水で、
黄色が雷で、
橙色が地で、
新緑が風で、
茶色が木で、
肌色が光で、
闇色が闇で、

黄緑が無、でしょ！！！！」

「ああ……俺はなんてバカな……訊くんじゃなかった……」
レットが全力で後悔していた。

あれ？僕はちゃんと言ったつもりなのに……。

レットが白くなって薄い影が更に薄くなっている、僕は色々実験していた。

ファイアボール

「火球！！！！地割れ！！！！微嵐！！！！」

クエイク

ウインド

どんっ！！がっ！！！！びゅう！！！！！！

「凄いな、ゲームの初期魔法が簡単に……！！！！」

僕は更に実験することにした。

「剣を使おうかな……」

僕はレットの背中にある、確か『絶龍剣・エターナル』とかいう、厨二な剣を引き抜いた。

重量が半端じゃないが、魔力を腕に流して強化する。

あっけなく持ち上がって、違和感があるが、気にせずあの技を放つ。

「魔○剣！！魔○剣・双牙！！！！魔○連牙斬！！！！」

一気につなげてあの尻尾たちのゲームの技を放つ！！！！

凄いや！！！！もう何かつかんだよ！！！！

僕がそう喜んで居るのもつかの間、さっき飛ばした○神剣が草むらの中へ消えた。

ずしやあ！！！！

『ぎやあ！？』

そんな声に気付いたのは、全くの偶然だった。

第8話：魔力の使い方（後書き）

アリア…「テイ○ズ!？」

作者…「いきなりツツコンできた!?!?! そうだよそれがどうs——」

アリア…「パクリだよ!?!?! まさかこれからもそういう——」

作者…「ポーカーの役の名前からとった技名があるよ!?!?! 失礼な!?!?!」

アリア…「変わんねえ!?!?!」

感想、評価、誤字脱字の指摘等、まっています!!

第9話：急襲（前）・二人の戦闘

「今の声……!!」

不意にレットは言った。

真っ白くなっていたレットだったが、どうやら『スイッチ』が入ったようだ。

僕はまだ状況が呑み込めない。

人の声かと思えば、レットの様子から見ると魔物だろう。

レットは背中に手をまわして剣を取ろうとしつつ、僕に言う。

「魔物だ!!……あれ？剣は？」

「魔物……？って剣は僕が持ってるよ」

……スイッチは入っても、レットはレットか……。

僕はレットに剣を渡しつつ、そう思った。

「……アリア……。フォルティムはあるか……？」

レットはそう聞いてきた。

忘れていたが、この武器の使い方は知らない。

見れば刀身と銃身が柄に2つつ付いている形だ。

それが双振り。

柄の真ん中には青い大きな宝石。

刀身は少し金色がかっている。

銃身に施された装飾は、幾何学的かつ繊細で、

同じく金色がかった色に青い宝石が付いていた。

柄の部分からは金色の小さい棘のようなものが一つ、出ていた。

僕はレットの問いに答えるべく、腰につるした武器を一瞥し、短く答えた。

「ああ」

そういったあと、柄を握り、ポーチの様なバンドから外した。

「これだろう？……このままじゃあ剣として使えないぞ？」

そしてさらに、一言付け加える。

「説明しろ。この武器について」

一瞬、レットは逡巡を見せた。

だが、すぐに目に強い光を宿し、僕にこう告げた

「時間がないから深くは話せないが……これは俺の友達が設計した武器だ。

でも、設計だけで作ってはいない。それをどこで手に入れたかも……後で訊くとして

この武器は使用者の戦闘タイプに依存して、というか、イメージ通りの働きをする。

形が変われ、って願えば変わるし、切れ味や弾道も変化する。

要は、「お前の武器だ、使い方もお前のイメージ通りだから勝手にしろ」ってことだ。

……さてと、少し話すぎたな。奴等、仲間つれて報復しにきやがった。

あ、この魔物は討伐対象じゃないし血の出ない奴らだから……要らん心配はするなよ。

全力で行け」

どこかの熱血監督のような台詞^{セリフ}を残し、レットは駆けた。

第9話：急襲（前）・二人の戦闘（後書き）

今回は短めです。

次回は……長めになるかな？（中）にして短くするかも……

そんなこんなで次回は戦闘。

アリアのチート能力が本格起動します。

お楽しみに！！

感想・評価・指摘等お待ちしております！！！！

第10話：急襲（前2） ・ 道化師の真似事（前書き）

今回は完全にフラグ回です。

ってことで（前2）……べ、別にいいじゃないですか……!!!!

第10話：急襲（前2） ・ 道化師の真似事

ギルドには『チーム』というものがある。

主にギルドのメンバー同士での仲間——パーティを指す。

私は、ギルド…アルビオンに加入している、『紅焰』^{あかほ}の異名を持っている

フオニアルレツドル。

私もパーティを組んでいて、まあ、国でも結構有名。

名前は『道化師の真似事』^{クラウン・オブ・ザ・コレー}。

3年前の戦争の時に結成して、その時は2人だったけど、今は4人に増えた。

私は、『道化師の真似事』のパーティリーダーを務めているの。

……まあ、自慢じゃないけど、そこらの人よりは強い自信がある。

といっても、レットさんには適わないけど……。

単体じゃあ私の負けだけど……4人で行けば何とかなる……と思う。

あの人は周りからはモノ凄く嫌われている。

まず、誰も話しかけない。

話すのは、私と、パーティのメンバーと、ファウンドさんと、あのアリアって娘だけ。

みんな一歩引いてる、って感じだし、一時は指名手配もされた。

……レットさんがあんなことをしたのは……私じゃあ何とも言えないけど

でも、何でもみんな嫌っているのかが分からない。

つとと、話がズレた。

この『道化師の真似事』、略称Copy of the Crownから、頭文字の『C o t c』で呼ばれてる。

メンバーは私、それから最初に仲間になったクレス・リュート。彼は緑色の髪に、変な仮面をつけている。

まだ弱いけど、その成長の仕方がスゴかった。

長剣ソードを使って敵を屠る事から、『一刀両断グラディエーター』の異名がある程。

足手まといにはならないし、居てくれて信頼ができる第一の仲間よ。

次は、リコリス・リュート。

このギルドはリコ・ファウンドさんが居るから、ファウンドさんは下の名前、

リコリスはそのままリコリス、って呼んでる。

リコリスは東洋の『猫又』って種族の女性で、語尾に「〜にゃ」とかをつけるの。

……私も時々、「〜にゃ」って言っちゃう。

そのたびに「私は人間っ!!」って言ってるけど……仲間になんかやう。

まあ、私の中では一番の親友だし、そんなに苦じゃないけど……。

つとと、そうそう、リコリスは凄く強い。

近接武器を使った攻撃の威力は凄まじいモノがある。

特に、片手剣の『アギト』という銘の刀で使う技だと、『閃光波剣フラッシュ』は、

剣技の中でも群を抜いて性能が高い。

振る度に波紋が広がって、呑み込んだモノを破壊する――。

つけられた名前は『閃士アギト』。

その剣の名前から付けられた、真の戦士の称号。

そして、ラセツ・T・ドクロ。

名前のパターンが違うから、分かると思うけど……彼も外国の方よ。ピンク色の髪でイケメン。

彼はある日突然「感覚をつかんだ……!!」なんて言って、私たちは半信半疑だったけど……

その言葉はその通りだった。

動きが格段に良くなって、舞うように敵を蹂躪するようになった。惚れてしまいそうなくらい、綺麗な動きで……まるで芸術ね。

最後に私、フォニアレッドル。

『紅焰』の名の通り、焰を使った攻撃を主体にしている。

一時は『煉獄女王』なんて言われたけど……『紅焰』で落ち着いた。そのあだ名から「紅^{あか}ちゃん」、って呼ばれるけど……背が低い事の罵倒にしか

聞こえないよ。

……私は雷の魔法で敵に隙を作って、双剣——銘をエスペランサー——でとどめをさす。

基本は後衛だけど……剣だけなら正直、リコリスよりも強いと思う。

そんなこんなで、私達はファウンドさんから依頼を請けた。

内容は——

『レットたちの依頼の補助と手伝い』。

レットさんの手伝いなんていらなと思うけど……なんかファウンドさんは

「嫌な予感がするの」の一点張りで、結局、請けた。

まあ、いくらあのアリアって娘が弱くても、レットさんなら大丈夫だろうけど……本当に、

私達も嫌な予感がする。

さっきから出会う魔物も強くなっているし、数も多い。

早く合流しなきゃ、取り返しのつかないことになるかも知れない。

そう思いつつ、私はウルフに一連、剣を重ねた。

第10話：急襲（前2） ・ 道化師の真似事（後書き）

感想、評価、指摘等、待ってます♪

『オイ、こら、出せって、僕は何もしてな——』

あ、アリアうるさいよ……。

第11話：急襲（中）・猪狩り（前書き）

モンスター図鑑（↑オイ

猪（正式名称…ファンゴ）

体長5 m

危険度…☆☆☆（全5段階）

でっかい猪。それだけ。

鬼猪（正式名称…オーク）

体長1.6 m

危険度…☆☆

角の生えた二足歩行の猪。ドラ○エの「オーク」の槍なしみたいな奴。

イメージすると気持ち悪い。

第11話…急襲（中）・猪狩り

「要らん心配はするなよ。全力で行け」

そう言われても、人間は行動できないものである。

……。

とまあ、現実から逃げてる訳だが……戦わなきゃ駄目？

うゝ……「イメージ通り」って何！！

感覚で覚えるタイプですか！！

僕はレットを心の中で罵倒しつつ、こうかな？

とか思いながら、『フォルティム』の柄を握り、斬らないように縦に振る。

まさか、金属音がして刀身が柄の上に来て、ちゃんとした（銃身はついているが）

剣にならないよね。

ガチャン！！

……。なるほど……イメージ通り、か……。

フォルティムは僕の半ばフラグ的思考通り、刀身が柄の上に来て『剣』になった。

刀身は少し湾曲した、確か『ソードブレイカー』というような

西洋剣の形に似ていて、片手剣。

それが2本にいつの間にかなっていたけど……二刀流だから、文句は言えまい。

僕はそれを、四条流の構えに持って、「空気みたいに軽いな」と思いつつ、

駆けたのだった。

◆SIDE…レット◆

目の前の鬼猪^{オーク}をエターナルで両断した後、アリアの方を見た。
アリアも戦うみたいだな。

また鬼猪を一薙ぎ、傍観する。

鬼猪の顔面に一太刀、そこから直線的な全身回転斬り。

その直後にジャンプ、鬼猪の頭を通りこして、背中に剣を突き立てる――。

これで、一匹。

辛そうな顔だが、恐らく大丈夫。

アリアは背中に居る鬼猪を蹴りつつ、一步踏み込んだ。

（剣速は申し分ないし、太刀筋も洗練されている……。でも、隙がまだ在るな。

これが終わったら稽古か……）

などと、俺はらしくない事を考える。

そこへ鬼猪の突進がくるが、ジャンプと同時に斬り、着地と同時に真っ二つ。

でもって前屈み状態での腕X！！

……うん、俺、カッコイイ！！！！

ふふっ、アリアは――？

そこには、金色の炎の膜に身を包む、女王が居ました。

そこに鬼猪が襲いかかりますが、膜に触れた途端、消えて行きます。つまりは、立ってるだけで、魔物を、倒しているのです。

膜の中のアリアは、ヒマそうに欠伸をして、こっちを見ました。

「あ、レット〜。何かでた〜」

何が出た！！

その膜か！！！！

って、「なんか出た」じゃねえよ！！！！

というツツコミすら無視して、俺はただただ、呆然とする。
突如、視界がブレる。

頭にも衝撃が走り、我に返る、という言い方は変だが、呆然とした状態から回復する。

「おっとと……ありがとさんよっ!!」

左手の拳で殴る。

俺は感謝の言葉を述べたが、それは相手にとっては致命的な死の呪言だ。

思考の内に鬼猪の頭ははじけ飛び、横に倒れる。

ただ殴ってはない。

魔力を込めて、『インパクト衝撃』の術式を込めた左手の威力だ。

——『衝撃』。

対象物の持つ衝撃を増大し、破壊・爆裂を誘発する魔法。

空気の揺れの残る中、後ろを振り返る。

見たところ、俺の硬直時間は相当に長かったようだ。

11匹は居る。

11——『ロイヤル連斬破』の斬撃数と同じ——。

俺は剣を握る手の力を、右の腰のあたりで抜いた。

左足が前になり、右足で衝撃を吸収しつつ、跳ねる。

魔法剣技の——半ば癖になりつつある——名前を叫んだ。

『ロイヤル連斬破!!!!』

右半身を後ろに捻ると同時に、エターナルは輝き始め、力を溜めた。

それはほんの一瞬。

剣はすぐに閃いて目の前の敵を切り裂く。

——と言っても、俺は前に突きを放っただけで、後は何もしない。

魔力の斬撃が一つずつ、鬼猪を蹂躪する。

そして俺の剣が最後の一匹を捉えた。

のこりは——と、鬼猪の数を数えようとした時、それは起きた。

第11話：急襲（中）・猪狩り（後書き）

感想、評価、誤字脱字の指摘など、待ってまゝす

『いいから出せっ！！！こら、後書きに出演してたじゃないk——』
ま、まってまゝす☆（汗）

第12話：急襲（中2）黒焔（前書き）

石造魔（正式名称：ストーンゴレム）

体長6 m

危険度：☆☆☆☆（全5段階）

動く気持ち悪い苔の生えた石像。

第12話：急襲（中2）黒焰

私達は、此処に居るハズの無い魔物——ストーンゴレム——を倒し、平原を進む。

遠目から見ても、明らかに戦闘が起こっている。

それも——激しい、戦闘。

明らかに此処の原生生物や魔物と戦っていない。

私は、一度『咎』を見たから分かる。

『咎』との戦闘——。

でも、どこかおかしい。

何か——何か、普通の『咎』では無い気がする。

心臓の鼓動が早くなる。

嫌な汗があふれ出る。

必然的に、走りは速く、意識は遅く、なってゆく。

そして、

視界に映ったモノは、

黒い、炎だった。

「な、にこれ……。こんな炎の魔法、見たこと……」

「紅焰！！危ないみゃー！！！」

気付くと私はリコリスに押し倒されていた。

押し倒されていたのは、何も悪意があるわけではない。
いや、むしろ善意故だ。

「ゴ、ゴメン……。あ、レットさん……。！！！」

素直に私は謝って、その直後にレットさんを探した。

「紅焰!!! お前、何で此処に……!!!!!!」

レットさんが声をかけてきた。

何もレットさんだと言う確信は無いが、そう信じざるを得ない。

「リコさんから依頼を請けました。『レットさんの補助』をします。で、一体何があったんですか……?」

黒い炎が燃えさかる中、レットさんはこちらに駆けてきた。

「それが俺にもな……。アリアがいきな——な、もう起きたのかよ……!!!!!!」

剣をとれ、戦うぞ!!!!!!」

アリアさんに何が起こったのかは知らない。

でも、レットさんの様子からして、『なにか』が確実に起こっている。

私は背中にまわした杖をとり、いつでも魔法が放てるように構えた。

レットさんは大剣を腰のあたりに構える。

クレスも背中の大剣に手をかけ、

ドクロも銃を胸の前に持ち、

リコリスも左手に盾・右手に剣を持つ。

刹那の静寂。

聞こえるのは炎の音。

それは時間にしてほんの1秒。

突如、炎は不自然にはためく。

炎の海は割れた。

そこには一つの人影。

その黒い炎の中から出てきたのは——

黒い、アリアさんだった。

髪も、眼も、そして、雰囲気も……！！！！

これは、『咎』だ。

でも、

どうも普通の『咎』じゃない。

私には、そう思えて仕方がなかった。

悠々と歩く姿は、何者も寄せ付けないよう。

纏う炎にすら威厳を感じる。

両手に握られた剣は、淡い漆黒の光を放つ。

やがて歩みは速くなり、空気が揺れた。

「つく！？」

「クレス！！！！」

アリア——『咎』にクレスは吹き飛ばされた。

仲間を傷つけたのなら——こいつは、敵だ。

長杖を振りかざし、私は叫ぶ。

イラブション
「溶岩流！！！！」

『溶岩流』——。

瞬間的に地震を指定の範囲に起こし、地面からマグマを吹き出させる、

炎×土属性系上級単体魔法。

柱のように吹き出るマグマは容赦なく『咎』に襲いかかる。
が、信じられない事が起こった。

「魔法が……燃えてる……？」

魔法は非物体には効果がないし、故に物体では傷もつけられない。いや、現在魔法を壊す手段は一つしかない。それは、圧縮した巨大な魔力の塊を魔法陣に直接ぶつける、無属性系無効化魔法。

無効化魔法とは、物体には効果のない魔法。つまりは、眼に見えない。

直接魔法の効果だけが消される。

だがこれは――

「マグマが……燃えてるのか……?」

そう、

信じられない事が――。

ブレイブストーム
「熱竜巻!!!」

『熱竜巻』。

炎の混じる竜巻を指定の方向に発生させる、炎×風系上級範囲魔法。

「うそだろ……!! 風も、燃えて……!!!!」

ドクロの口から声が漏れる。

そんな動揺はいざ知らず、『咎』は不適に微笑みを浮かべた。

「かまうな!! 一太刀浴びせろ!!!!」

レットさんの声。

その声に安堵したのかは分からないが、そんな動揺はもう心の奥底へと消えた。

「閃光波剣!!!」
フラッシュ
ウインド・バレット
「旋風弾!!!」
ダブル
「双斬破!!!」
フリースソード
「蛇氷剣!!!」
インフェルノ
「地獄業火!!!」

『閃光波剣』は光を発生させ、触れたモノを斬る剣技。
ソードスキル

『旋風弾』は、竜巻を纏った弾丸を放つ銃技。
ガンズスキル

『双斬破』は、一度に斬撃を二つ発生させる剣技で、

『蛇氷剣』は地を這う蛇の如く冷気を斬撃と共に発生させる剣技である。

私の『地獄業火』は、『溶岩流』の強化版。

重ね重ね放たれる声。

否、声だけではない。

光や、各属性のエフェクトも、である。

だが、それでも、

さっきから右の手首だけで、ステップだけで魔法や技をいなし、躲かれる。

その様は遊ぶ様にも見えた。

戦闘は続く。

永遠とさえも思えた。

意識は更に更に加速する。

未だに通らない攻撃は、もう威力を失いつつある頃だった。

「みんな、離れろっ!!!」

レットさんの声。

大技を放つようだ。

レットさんはそこから溜の初動に入り、それに会わせ私達も攻撃する。

ロイヤルストレートフラッシュ
「嵐牙狼斬破！！！！」

無数の――いや、数多の斬撃が『咎』を襲う。

突きのように、刺すように、黄緑色の光は絶えること無く閃き続ける。

この剣技は、いわゆる『奥義』。

88の斬撃をたったの一振りで起こす、レットさんの持つ手札で4番目に強いモノ。

88とは、

ストレート(1)×ダブル(2)×フラッシュ(4)×ロイヤル(11)の積。

嵐のような斬撃と、地面を穿つ突きのロンド。

だがそれも――

黒い炎に、燃やされていた。

絶望感のしたその直後、

インパクト
「衝撃波！！」

レットさんは剣を振り上げて叫んだ。

その衝撃波は『咎』を吹き飛ばす。

「つあっ……」

その声は、か細く縊るようにも聞こえる。

ぐっと、唇をかみ、杖を双剣に持ち替えようとした時――。

「紅焰！！」

レットさんは私を呼んだ。

レットさんは『格納庫』の術式を張り、そこから双振りのナニカをこっちに投げた。

「それは『^{スタン}気絶状態』専用の双剣だ！！取り敢えず気絶させろ！！
この中で双剣を使うのはお前だけだろ！？一つでも二つでも良い！
！技を決めろ！！」

レットさんはそう言った。

正直な話、双剣の扱いは上手くない。

片手剣が本来で、双剣の技で使えるモノは一つ。
でも――。

今はそれで十分、いや、十二分だ。

「わかりました！！！！」

私の双剣と大した重さの違いは無い。

剣を胸の前に構え、魔力と意識を集中させた。

最後の気力を振り絞り、私は私の『奥義』を決める。

「^{あか}緋い剣の煌めきは……」

麻痺剣は紅蓮の炎を纏い始める。

「彼の者を焼く業火となりて、」

体を纏う魔力はいつの間にか炎に変わっていた。

「閃く刃は、天翔^{かけ}る鳳凰の光となろう！！！！」

爆発するかのように、魔力があふれ出る。

体がかがめ、両手を両翼へと変えた。

手には、巨大な翼の形の炎を纏わせ、

これから駆ける先の道には障害物など一つもない。

確認するヒマなどなく、

右足を全力で、魔法の補正も使いながら、踏み切った。

そのまま飛んで行けるような気さえする。

『咎』の前までくるのに、一体何分かつただろう。

見開かれた両目は、確実に私の焰^{ほむら}を捉えている。

そのまま、両手で交差斬りを放つ。

同時に、

叫んだ。

「鳳凰煌^{ほうおうきひせんしょうじん}緋閃翔刃！！！！！」

灼熱の地獄も、

烈火の竜巻も、

紅く煌めく斬撃も、

私の意識は確認することもなく、

深い暗闇に沈んでいった。

第12話..急襲（中2）黒焔（後書き）

『テイ○ズ』パクった感があるけど……まあ、作者の厨二病という事で許してw

……。

技の名前で良いのと思いつかない……!!

アイデアある人は感想で!!

と言う事で、感想、評価、指摘など、待ってまゝ☆

……ん？アリア？知らないよ。何か最近出てないね（汗

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1521y/>

とある咎人達の冒険譚

2012年1月13日16時52分発行